

# 乳児期にけいれん重積を契機に発症した海綿状血管腫の一例

大川 優子<sup>1)</sup> 城谷 吾郎<sup>2)</sup> 井原由紀子<sup>1)</sup>  
井手口 博<sup>1),3)</sup> 廣瀬 伸一<sup>1),3)</sup> 安元 佐和<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup> 福岡大学病院小児科

<sup>2)</sup> 医療法人 共立医院

<sup>3)</sup> 福岡大学医学部小児科

<sup>4)</sup> 福岡大学医学部医学教育推進講座

**要旨：**はじめに：海綿状血管腫は20歳から50歳代が好発年齢であり，頭蓋内出血やてんかん発作で発症する．今回我々は，けいれん重積で発症した海綿状血管腫の乳児例を経験した．乳児期発症例は稀であり，その臨床像，治療予後について文献例を含めて報告する．

**症例：**8か月男児．1病日に不機嫌，眼球左方偏位を伴う全身性間代性けいれんが出現．30分以上持続する重積発作で，ジアゼパムの静注により頓挫した．来院時JCSII-30，左方への追視が正中より45°までと不完全で，視野障害を示唆した．脳波では右前・中心側頭部に高振幅棘徐波複合，多棘波，徐波が連続して出現．頭部CTで右側頭葉に5×3×3cm大の周囲に浮腫を伴う高吸収域を認め，頭部MRIで右側頭葉に多房性の出血巣，周囲に浮腫を伴う腫瘍性病変を認めた．脳波所見と画像所見より海綿状血管腫，症候性てんかんと診断し，カルバマゼピン（CBZ）内服を開始，腫瘍摘出術を施行した．病理組織検査ではHemangiomaであった．術後も眼瞼ミオクローヌスが持続したが，CBZ増量で発作，脳波所見の改善を認めた．現在，発作は消失しており，発達経過も良好である．

**考察：**本症例は巨大な血管腫であり，早期摘出手術と薬物療法によりてんかん発作を消失する事が出来た．小児期における海綿状血管腫において腫瘍から出血する頻度は少ないと報告されており，摘出手術の適応には極めて慎重でなければならないが，摘出報告例ではてんかん発作は軽減，または消失し，抗てんかん薬を中止出来ており，乳児期発症症例において診断早期に摘出することの是非については今後さらに検討を要する．

**キーワード：**海綿状血管腫，けいれん重積，症候性てんかん